

陳述書

2025年3月23日
住所 東京都新宿区
氏名 ●●

私は、結婚に伴い、自身の名字を夫の名字に変えました。

フルネームが「私」を示すものであることはもちろんですが、外国とは異なって、名字で名前を呼び合う場面の多い日本社会では、夫の名字で呼ばれることが増えていき、少しずつ、私という存在が消されていくような気分を味わっています。

特に、最近、不妊治療を始めてから病院に行く機会が増えたことにより、夫の名字に自分が浸食されていくという感覚を感じるが増えました。

不妊治療の専門クリニックでは、プライバシー保護の観点から、待合室では番号で呼ばれますが、検査や医師との面談の際には、本人確認のために、自らフルネームを名乗るように求められます。その際に名乗る名前は、戸籍名でなくてはなりません。

他人から戸籍名を呼ばれることはもちろんですが、自分自身の名前が、●●(旧姓)だと思っているのに、××(戸籍名)と名乗らなければならないことがこんなに辛いことだと思っていませんでした。

自分の内心とは異なることを言葉に出して繰り返し繰り返し口に出すことで、そのたびに、自分自身に嘘をついて、自分の意思に反して、自分の存在を自ら消していくような、そんな感覚になります。

結婚して、時間が経てば経つほど、夫の名字で生きていくことに諦めがついてくるのかと思っていましたが、むしろ逆でした。

自分の名前で生きていくことができない場面が増えていく度に、やはり私は●●であって××ではないとの思いが確信に変わっています。

それはまさに、私の名前こそが、私そのものだからで、誰にも奪われてはいけないものだからです。

裁判所には、結婚に伴って名字を変えた人たちの問題を、単に「不便」だという問題と、誤って捉えないでいただきたいです。

この問題は、私たちの人格に関わる問題です。

どうか、私たちの声に耳を傾け、公正な判断をお願いいたします。